

氏 名 七田 麻美子

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大甲第 1214 号

学位授与の日付 平成 21 年 3 月 24 日

学位授与の要件 文化科学研究科 日本文学研究専攻
学位規則第 6 条第 1 項該当

学位論文題目 平安後期儒者文化圏の研究

論文審査委員	主 査 教授	山崎 誠
	教授	中村 康夫
	教授	寺島 恒世
	教授	藤原 克巳（東京大学）
	教授	佐藤 道生（慶應義塾大学）

論文内容の要旨

本論文は平安後期（後朱雀朝から鳥羽朝にかけての約五十年間）の起家と重代の二人の儒者の文学状況を、彼らの残した作品を註釈的に読み解くことによって、明らかにすることを目的としている。序章と終章を挟む三章で構成され、第一章は起家文学の様相、第二章は儒者文人圏における文学のあり方、第三章は重代儒者の文学状況となっている。

対照的に扱われる二人の人物のうち、最初に登場するのは、院政期前夜より、その活躍が認められる起家の藤原式家の明衡（と彼を中心とした人物たち）である。彼らの漢文学作品には共通するいくつかの特徴がある。その主要な特徴の一つに、同時代の儒者の相互交流を通じて広まったと考えられる、新たな文体の創造と流行がある。もう一つの特徴は、前時代までの日本漢文学作品の積極的な摂取である。なかんずく後者の要因としては、明衡自身が編纂した『本朝文粹』の存在が大きな役割を果たしていることがあげられるだろう。

こうした状況下における文学が見せた特徴的な姿は、「和化」というべきものであったと考える。これは、さまざまな儒者たちの複雑な思念思惑の中で徐々に培養されて、新しい時代の文学を切り拓く契機となった。そこには、むろん累代の儒者達の参画も認められ、起家のみの、新興勢力の風変わりや突飛な行動とばかりは言えない、この時代を覆う全体的な流行となっていたとみられる。

この時代を代表する人物として、藤原明衡の存在はたいへん大きい。明衡の文人としての位置は、起家儒者の中心的存在として、また官僚機構の中での政治的社会的要請の中から、求められ形成されたものであった。その明衡が創作した漢文学作品は、このような政治的、社会的、文化的に新しい潮流に乗ったものであった。それらは個人的な営為に終わることなく、儒者同士の交流の中で、次第に広まっていき、流行をみせてもいる。その中から、新しい文学が生み出される様相が、あまた窺えるのである。

このような新傾向の文学が、どういった要因によって支えられているかを、具体的な作品の解説と分析を通して見てみると、一つには前時代までの文藻を躊躇なく貪欲に吸収して、自らの作品中に使用するという傾向が挙げられる。また、明衡の『新猿楽記』などの作品に顕著のように、民衆の文化を積極的に作品中に取り込む文化的側面も考えられるところである。この二つの傾向が複合的に作品の上に現れるのがこの時代の、つまり明衡達の漢文学作品の特徴であるといつてよい。このような傾向を持つ漢文学が、より多くの人々によって試され、享受されるようになったが、その反面で、一部の儒者にとっては、それら一般的に受け入れられやすい詩文との差異化個性化をめざし求めて、より難解な文学を作ることに腐心するという傾向をも生んでいる。このような文学的状况の中に登場するのが、もうひとりの重要人物、重代の大江匡房である。

大江匡房の文学の特質を一口に表現し評価する場合、それは表現の晦渋難解さを伴っていることに特徴が見られると言っても過言ではない。この時代において見る場合、匡房の個性的な晦渋難解さと、同時に見られる重代の家学の学問を誇る矜持の姿勢には、相反する側面がある。すなわち、そこにこそ（難解な表現の修練と獲得を指す）、多くの起家の儒者が参画できるという文学状況が生まれている。新たな難解な文学を、そのまま呈示して、それが理解されないということは、この時代には表現としてあり得なかったはずであ

る。それは、参入の入り口の広がった文学状況に対応して、より多くより深く、新しい儒者達の作る作品が、匡房の作品と同じように難解であり、それら難解な儒者文学を創作し享受される状況が開けていった、ということでもあるからだ。こうした文学状況が、院政前期の文人文化圏には新たに生まれたのであった。更に、このような文学を求める白河院政時代の政治的社会的な環境の中で明衡の子息達（およびその世代の儒者達）の手によって加速されていった。このことを考えると、平安後期、更には院政期という時代の文学特質がより正しく見えてくると言える。

それを漢文学の特質に限って見た場合には、「和化」という文学状況といえるだろう。しかし、これを漢文学の衰退とみるのは近視眼的な誤りである。文学がより広汎な対象世界を開拓し、新たな表現を獲得していった、その先に生じた状況こそが、平安後期以降の真の漢文学の特色だからである。

論文の第一章第二節及び第3節、第二章第二節、それに第三章第二節については、一部を、「『本朝無題詩』の山寺詩—慈恩寺詩を中心に」『日本・中国交流の諸相（アジア遊学別冊3）』（2006年）、「吉祥考—平安時代後期の「松」」『創る・訪ねる・見る』（2007年）、「大江匡房「花樹契遯年」詩序訳注」『国文学研究資料館紀要 文学研究篇』34号（2008年）、「『比叡山不断経縁起』小考」『海を渡る天台文化』共著（2009年）で公表している。

論文の審査結果の要旨

七田麻美子氏は、博士論文「平安後期儒者文化圏の研究」に於いて、藤原明衡と大江匡房という平安後期を代表する二人の儒者の人物の対比の手法を用いて、この時代の漢文表現の特質を、詩序と和歌序という切り口から、その言語表現の達成と展開をとらえ、専門分野の知識と方法を十分に修得し、先行学術研究の成果を踏まえて、難解な表現の「あや」を深く精緻に分析し、独自の注釈的考察と明快な論証を加えている。

全体は序章と終章をはさむ三つの章及び各章で言及する作品の詳細な注解で構成されている。

先ず第一章「起家文学の様相」では、藤原明衡の長元二年省試不正事件の経緯を追い、中心人物としての明衡の人物像とその仲間の儒者の解明を行っている。次にはこの不正事件をきっかけに集った明衡を中心とする詩人達による「本朝無題詩」の山寺詩を取り上げ、その文学的特徴と達成を論じている。最後に「比叡山不断経縁起」を扱い、天台浄土教を核とした人物の交遊に優れた分析をおこなっている。

本体とも云うべき第二章「儒者文人圏における文学のあり方」では、作文会（詩会）の詩序と和歌会の和歌序を対比的に取り上げ、儒者（漢詩人）の関わり方についての興味深い分析を行っている。付章では「松」という文学素材をとり挙げて、緻密な素材史的考察をおこなっている。具体的には「釈奠詩序」の歴史的展開を俯瞰し、明衡の編纂した『本朝文粹』という作品の文学的意義について鋭く切り込んでいる。『本朝文粹』の文学シソーラスとしての文学史的意義を三つの「釈奠詩序」の註釈作業を通して実証しようとしている。最後に和歌序に於ける儒家の貢献役割について、その特色を「和訓」の問題を中心に分析考察している。

第三章「累代儒者の文学状況」では、大江匡房の撰家師実師通父子によって催された二つの作文の詩序「琴雪携雪裏」「花樹契週年」を注釈的に取り上げて、大江匡房の詩文の継承の視点から、藤原明衡との違いを鮮やかに切り出している。今まで特に取り上げられることのなかった『本朝続文粹』に収められる二篇の詩序の考察として評価される。

以上の問題意識を高く評価するものである。内容的に精粗の差がみとめられる点、文章表現に彫琢が足りない箇所も見受けるが、表記体を異にする漢文学という日本古典文学の一分野に、一つの達成がなされたことを認めたい。おのおの章は現在の課程博士論文の学術水準に到達していると思慮され、さらなる論証を重ね論証不足を補った上で論文として公開されれば、学界に貢献することが期待される。